



■内なる芽生え— 1 学期始業式にて—

今日から1学期、令和6年度が始まります。皆さん“踊り場”での修正はできましたか？昨年度の3学期終業式では「この春休みを“階段の踊り場”にとらえ、あの時のこと、その時のことを自分なりに振り返り、一つ上のステージを目指すための修正期間と考えてください。「踊り場」は英語では「landing」



（着陸）と表現します。皆さんそれぞれが設定した目標地点に landing = 着陸できるよう、自分自身に『向き合い』ながら充実した春休みを過ごしてください。」という話をしました。そして「新年度の始業式で、やる気に満ち溢れた皆さんの眼差しに出会えることを楽しみにしています。」と伝えました。

新学期を迎えた今、皆さんの“やる気スイッチ”はオンになっていますか？

春のこの時期は、落葉していた木々の枝にも徐々に新芽が見られるようになってきます。私の自宅にも地植えや鉢植えの落葉樹があります。秋に落葉し寒い冬の時期は枝だけの姿になり、中には本当に枯れてしまったように見えるものもあります。3月終わりに、もう枯れてしまったと思い処分するために庭の片隅に置いていた鉢植えの木の枝から緑の芽が出ているのを見つけました。それを見つけた瞬間は、小躍りするような嬉しさの感情を抱くとともに、枯れてしまったと早合点していたことを詫言いました。慌ててほかの鉢植えも確認してみました。ありました。細い枝に小さな緑色の部分がありました。水も与えていなかった球根からも小さな芽が顔をのぞかせていました。見ようとしなければ、探そうとしなければ見えないほど小さな芽でした。もう枯れてしまったと思っていたら決して出会うことはありませんでした。

これを、自分自身にあてはめて考えてみてください。皆さん、何か思い当たるところはありませんか？自分自身のことは、なかなか見えにくいものです。見ようとしなければ、探そうとしなければいつまでたっても見えてくることはありません。人は日々、たくさんの刺激を受けながら過ごしています。昨日より今日、今日より明日と知らないうちに知識や経験を蓄積して成長しています。皆さんが意識しない間に、自分自身の中に新しい芽が顔をのぞかせてはいませんか？自分を客観的に見るための、もう一人の自分になって小さな新しい芽を探してみませんか？その小さな芽に出会えたら、大事に大事に育てていきましょう。一人ひとりに内在する芽は、ほかの人と比べるものではありません。自分なりの方法で、少しずつ大きく育てていきましょう。『その先に』、あなた自身のパーソナリティーが形づくられていくはずですよ。そして、自分なりの方法で、自己表現していきましょう。急がなくてもいいですよ。じっくりゆっくりと『向き合って』いきましょう。

今年度の合言葉は昨年度から継続して『**向き合う。その先に…**』です。ただ、今年度は副題として英文も添えました。『**Face it. Beyond that…**』です「Beyond」には、「～を超えて、～以上に」といった意味があります。今の自分を少し超えて、今以上の自分をめざして、今一度自分自身に『**向き合って**』みませんか？

ドイツの哲学者ニーチェは、その著書『人間的な、あまりに人間的な』の中でこう述べています。「高い自己に、ふと出会う日がある。いつもの自分ではなく、もっと澄みきった高級な自分自身が今ここにいるのだということに、恩寵のように気づく瞬間がある。その瞬間を、大切にするように。」と。

創立 80 周年に向けて 71 周年となる今年度、皆さんにとっても学校にとってもよいスタートが切れることを願っています。



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長 発『ほんりゅう』

【4月号②】令和6年4月10日



■入学式式辞

みなみ出雲に舞う桜 校舎周辺の桜と木々の新芽が輝くうららかな春の日差しのもと、令和6年度島根県立三刀屋高等学校掛合分校入学式ができますことは関係者一同大きな喜びです。

本日は、掛合分校後援会会長 景山俊太郎 様、学校運営協議会会長 小川真里 様、PTA副会長 吉村あつし 様をはじめ、多数の来賓の方々のご臨席を賜り、入学式を挙行することができました。誠にありがとうございます。5年ぶりに多数の来賓の皆様、在校生全員が揃って同じ式場・空間で新入生の皆さんを迎えることができますことを大変嬉しく感じています。

29名の新入生の皆さん入学おめでとう。在校生、教職員一同、皆さんの入学を心から歓迎します。数ある高校の中から本校を選択してくれたことに感謝します。その選択に全力で応えることを最初に約束します。

本校は昭和28年、1953年に創立され、昨年創立70周年を迎えた歴史と伝統を誇る学校です。皆さんはこの伝統ある三刀屋高校掛合分校、愛称カケコーの生徒として、本日その第一歩を踏み出すわけです。

入学にあたり2つのことをお話しします。まず1つ目は、合言葉についてです。私は昨年度校長として着任し、カケコーの合言葉として『向き合う。その先に…』を設定しました。向き合うと聞いて皆さんの頭に浮かぶものは何でしょうか？人？もの？それとも悩みや課題？向き合うの意味を辞書で調べてみると「互いに正面を向いて対する」とあります。「現実に向き合う」「課題に向き合う」あるいは「自分に向き合う」・・・そのことばのニュアンスとしては、あまり触れたくないものに触れる、見たくないものを見るという感じでしょうか。つまり向き合うためには一定の“覚悟”や“つよさ”が必要といえます。からだの“つよさ”ではなくこころの“つよさ”ということです。皆さんは進路選択の際に本校を選択し、今この場所にいるわけですが、これまでの人生でどんな選択をしてきましたか？順調なことばかりではなく、辛い選択をしたこともあったでしょう。ただ、その時々悩みや課題に向き合い何らかの選択をしてきたことと思います。高校入学というこの機会に、これまでの自分に少し向き合ってみませんか？そして、これまで経験してきた多くの分岐点で決断をしてきた自分を認めてあげてはどうでしょうか。色々あったかも知れないけど今この場所にいるじゃないか。頑張ってきたね自分！向き合うその先には、きっと新しい世界、可能性が開けていると思います。

2つ目は、**自分を表現する方法**を見つけてほしいということです。表現する方法は、発表したり文章を書いたりすることだけではありません。部活動においてスキルアップを図ること、作品の制作をすること、あるいは自分の趣味や特技を深めていくことも自分を表現していく方法につながります。カケコーには、本物の地域密着、本物の少人数教育を教育活動の両輪として掲げ、皆さんが自分を表現できる場所・機会が数多くあります。もちろん学習面で自分を表現する方法だってありますね。学習や地域と協働した活動等にチャレンジしてみてください。自分を表現する

先は他者ばかりではありません。他者に対してではなく、自分に対して表現してみることも意味のあることです。自分のことは、自分自身が一番よくわかっていると思いがちですが、自分のことは、なかなか見えにくいものです。自分を表現するために、もう一人の自分になって自分自身の内面と向き合ってみませんか？一人ひとりに内在する可能性の芽は、ほかの人と比べるものではありません。その可能性の芽を見つけたら、自分なりの方法で少しずつ大きく育てていきましょう。その先に、あなた自身のパーソナリティーが形づくられていくはずですよ。そして、自分なりの方法で、自分を表現していきましょう。急がなくてもいいですよ。じっくりゆっくりと向き合っていくましょう。

今年度の合言葉には副題として英文も添えています。『**Face it. Beyond that...**』です。「Beyond」には、「～を超えて、～以上に」といった意味があります。今の自分を少し超えて、今以上の自分をめざして、今一度自分自身に向き合ってみませんか？

校訓にある志操堅固とは、自分の考えや志を、強い意志で守って貫くということです。まずは自分と向き合い、自分の考えや志を確かめていってはどうですか。皆さんの可能性は無限大です。皆さんが「その先に…」進んでいけるよう、私たち教職員は、努力を惜しみません。

保護者の皆様、お子様のご入学おめでとうございます。義務教育段階の親の立ち位置は、子どもに寄り添うことだったと思います。高校でも、基本は変わりませんが少しずつお子様の自立を促しながら過ごす3年間だと思います。お子様としっかり向き合いながらも時には少し離れてみるという関わり方を願います

最後に新入生の皆さん、失敗を恐れずたくさんのことに挑戦してください。マイクロソフトの創業者ビル・ゲイツ氏は「成功を祝うのもいいですが、もっと大切なのは失敗から学ぶことです」と言っています。ただ、決して頑張りすぎないでください。皆さんは、保護者にとっても学校・地域にとっても大事な宝物です。“よわさ”を見せること、助けを求めることは決して恥ずかしいことではありません。教職員、保護者、地域の皆さん、そしてうしろにいる先輩。皆さんを応援してくれる誰かが、必ずいます。頑張りすぎるちょっと前に相談してみてください。

新入生の皆さんが、一日も早く、カケコー生として歩み始めることを期待して、式辞とします。

令和6年4月10日

島根県立三刀屋高等学校掛合分校
校長 本間 達也



■ゾーンに入る

アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは、著書『菊と刀』の中で、西洋文化が「罪の文化」であるのに対し日本の文化を「恥の文化」と述べています。日本人の行動様式を中心をなす考えは“恥をかかない”と“恥をかかせる”といったものであり、その根底には常に他人の目を気にする考え方があるとしています。つまり、日本人は西洋人のように「正しいか、正しくないか」で物事を判断するのではなく、「他人がどう思うか」で物事を判断する傾向にあるということです。『菊と刀』が出版されたのは1946年で今から78年も前のことです。戦前の日本人の行動様式は、現代の日本人とはかなり異なっていると考えられます。それでも、とにかく私たちは他人の目を気にしながら行動することが多いですね。他人の目が気になるのはなぜなのかについて、先日NHKのある番組では「他人の目を気にしておけば仲間と協力して石器時代を生き抜くことができるため」と説明していました。人間の歴史の99%は石器時代が占めていて、他人の目を気にしながら生活することは本能に刻み込まれているのだそうです。

私も何かをするときには他人の目が気になる性格です。ここでこうすると、或いは、ここでこう言うと他人はどう思うかな？と考えてしまいます。そこでは、自分を客観的に見ようとする“悪い”メタ認知が起こっているのです。大学時代に所属していた硬式テニス部では、何回か大会にも出場しました。試合途中で勝ち目が薄くなると「負けたけどあの選手はいい球打っていたね」という他人からの評価を勝手に想像しながら、そのカタチをつくって自分のシナリオどおりに負けていくこともありました。そのような状況においては、他人に何と思われようが、いや他人に何と思われるかなどと考えず、その局面にしっかり向き合う必要がありました。しかし、一生懸命試合している姿を見たら他人は何と思うだろうか？「強くないくせにあんなに…」と冷笑されるんじゃないか、という勝手な妄想によってその局面に向き合い切れない自分がいました。今となっては、その考え方が正しくないとはっきり言えますが、色々なことに自信のなかった当時の自分はそう考えがちでした。今の自分に自信があるというわけではないですが、少しばかり人生経験を重ねて考え方も変化してきました。そして、自分が考えているほど他人はネガティブな見方はしていなくて、むしろ「一生懸命なあなたを応援していますよ！頑張ってください！」と思っている方が多いのではないかなと思うようになりました。

もし他人の目が気になる人が多いのならば、自分が“他人”の立場になったときに前向きな声掛けをしてあげれば「他人の目を気にしている人」も安心して、その時々の局面に向き合えるのではないのでしょうか。大学時代ダブルスでペアを組んでいたM君は、いつも私に前向きな声掛けをしてくれました。現在福井県で小学校の校長をしているM君は、忍耐強い性格の持ち主でした。苦しい状況になっても、いつも「ここ頑張ろうや」と声を掛けてくれました。いいショットには「ナイスショット！」と言ってくれました。“他人”の評価がリアルに届く瞬間でした。M君と組んだダブルスで忘れられない試合があります。対抗戦で、格上相手に7-6、7-6の接戦で勝利した試合です。防戦一方で決まっちゃったように勝てたわけではないですが、M君からの評価によって安心して試合に“集中”でき、自分たちの世界に入ることができていたのだと思います。粘り強く試合を進めることで上手くポイントを重ねることができました。それは「ゾーンに入っている」

た」という感覚だったのかもしれませんが。よく「集中しよう」という声掛けをしますが、本当に集中するのはなかなか難しいものです。他人の目を気にせず自分の世界に入り込めた時、その時こそが本当に集中できている状態であり「ゾーンに入っている」状態といえるのではないのでしょうか。いかにして自分の世界に入り込めるか、それが日頃の練習の成果を発揮できるかどうかの分岐点であると思います。

皆さんには自分の世界に入り込むほど夢中になれるものはありますか？その出会いを探し続けていく過程もまた楽しいものといえます。案外、皆さんのすぐ近くにあるかもしれませんよ。



■雨が好きです

6月になりました。これから雨の日も多くなると予想されますが、ここのところは好天続きで梅雨入りはまだまだ先のように感じられます。雨は、時に災害をもたらす恐ろしいものではありませんが、農耕民族にとっては作物の実りという恵みをもたらすものでもあります。モンスーンアジアに位置し温暖湿潤気候が大半を占める日本は、年降水量が多く梅雨や秋の長雨の時期をはじめ雨の日が多くあります。そんな日常を過ごしてきた日本人にとっては、雨の降らない晴れの日が何か特別な日に感じられたのではないのでしょうか。晴れた日は心躍る気持ちになり、まさに心晴れ晴れとした「ハレ」の日という気持ちになるものです。ご近所同士の挨拶でも仕事上の会話でも、まずは天気の話から入ることが多いですね。天気の話が長すぎて本題を忘れてしまうこともあります。

歌手の中島みゆきは、自身が作詞作曲した楽曲『明日天気になれ』で「何ンにつけ一応は絶望的観測をするのが癖です（中略）雨が好きです 雨が好きです あした天気になれ」と歌っています。しかし、雨が好きなわけではありません。本当は晴れてほしいけれど、その願いが叶わなかった時の残念な気持ちに向き合いたくないため、心理的予防線を張り“何ンにつけ一応は絶望的観測”をしておくことによって、自身の心が傷つかないように、あえて逆のことを言っているわけです。リスクマネジメント（危機管理）においては“常に最悪を想定して”前掛かりで対策を講じる必要がありますが、ここでいう“絶望的観測”とは自身の心の働きへの後ろ向きな対策といえるかもしれません。2番の歌詞では「宝くじを買うときは 当たるはずなどないと言いながら買います そのくせかつて誰かが 一等賞をもらった店で買うんです はずれた時は 当たり前だときかれる前から 笑ってみせます」と歌っています。本心では当たって欲しいと願っているわけですが、その気持ちを悟られたくないという思いが込められているのです。

人は、願えば願うほど、その思いが強ければ強いほど、逆の結果に終わった時の落胆は大きくなります。スポーツ観戦の際に、^{ひいき}贍するチームの勝利を願えば願うほど負けた時のショックは大きくなりますよね。しかし、自分の気持ちに偽ることなく声援を送り、勝利したときには嬉しい思いに、負けた時には悔しい思いに直面し、その感情を受け入れ乗り越えていくことで一回り成長した自分に出会えるのではないのでしょうか。家族や友人に対する応援だったら、喜びや悲しみを共有することで一層強い絆も生まれるはずです。

あらゆることに対して一定の距離を保ちながら深く関わろうとせず常に評論家のように対応するクールな姿勢ではなく、時に熱い気持ちを持って物事に関わることは自分自身の殻を破る契機になるかもしれません。結果を恐れず、自分の気持ちに正直に向き合うことも必要です。その先に、共感してくれる他者の存在も見えてくるのではないのでしょうか。

ところで、最近本当に（笑）「雨が好きです」という方に出会いました。ALTのカーソン先生です。彼の出身地であるアメリカ・アリゾナ州は乾燥地帯に位置し、雨が非常に少ない地域となっています。乾燥地帯においては、雨は大地に潤いを与え、そこに暮らす動植物に恵みをもたらすものです。彼にとって「雨が好きです」は、“希望的観測”なんですね。



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【7月号】 令和6年7月8日



■『此中有大器』

※本稿は『三刀屋高校だより 蒼雲 143号』（令和6年7月8日発行）を加筆修正しています。

三刀屋高校（本校）は、今から100年前の1924年（大正13年）の4月17日に現在も三刀屋高校の校舎がそびえる雲南の高台「三刀屋が丘」に県内5番目の旧制中学校として55名の入学生を迎え開校しました。一方、掛合分校は、今から71年前の1953年（昭和28年）の5月1日に現在も掛合分校の校舎がそびえる佐中の高台「さながの丘」に“働きながら学ぶ定時制課程の農業科及び家庭科”の高校として26名の入学生を迎え開校しました。

本校・分校とも、開校により雲南地域に居住する学生の進路選択の可能性が大きく広がるとともに、雲南地域の発展に大きく寄与することとなりました。目を閉じて、開校初年度の入学生の方々の希望とやる気に満ち溢れた熱い本校生“110の瞳”、分校生“52の瞳”に思いを馳せたいと思います。

本校は2024年（令和6年）4月17日に、分校は2023年11月11日に、島根県知事・丸山達也様、雲南市長石飛厚志様をはじめ多数のご来賓の皆様にご臨席を仰ぎ、それぞれ開校100周年記念式典、創立70周年記念式典を盛大に挙行できました。改めまして心より御礼を申し上げます。また、これまで本校・分校の教育を推進し、その発展に多大な貢献をなされた皆様に対し、深い敬意と感謝の念を捧げたいと思います。

周年記念式典に向け、これまで編纂された本校・分校の周年史を拝読し“100周年”“70周年”という歴史の重みを痛感しています。なかでも、本校『五十年史』には1872年（明治5年）の「学制」頒布以来の本校を取り巻く歴史が、明治・大正・昭和という3つの時代を通して歴史教科書のごとく詳述しており、歴史的価値の高いものとなっています。その中に、島根県出身の若槻礼次郎元内閣総理大臣が1930年（昭和5年）に本校を訪れたとの記述があります。若槻は、本校来訪年の1月にイギリス・ロンドンで開催された海軍軍縮会議に首席全権として参加し、4月にはロンドン海軍軍縮条約批准という大役を果たしています。同年10月に郷土島根へ凱旋した若槻は、郷土歴訪の途中に本校を訪ねたと『五十年史』に記述されています。

若槻は、1866年（慶応2年）に松江市南部に位置する雑賀町に貧しい足輕の次男として生まれました。当時、足輕の家庭に生まれた子どもたちは藩の学校に入ることができなかったため、若槻はお寺や私塾に通うなどして勉学に励み、大蔵官僚から政界へ進出し内閣総理大臣にまで上



「此中有大器」若槻礼次郎書
(昭和10年4月2日揮毫、雑賀幼稚園蔵)



若槻礼次郎元首相来校記念写真
(昭和5年10月5日撮影)

*前列左から5人目が若槻元首相
後列左から2人目が馬場2代校長

り詰めました。本校を訪問した際、若槻は開校間もない本校で目を輝かせて勉学に励んでいる生徒の姿に、かつての自分自身を重ね合わせていたかもしれません。

若槻は何度か帰県していますが、1935 年（昭和 10 年）4 月に母校の雑賀小学校・雑賀幼稚園を訪れた際に「此中有大器」（このなかにたいきあり）を揮毫^{きごう}しています。「大器晩成」という四字熟語でもおなじみの「大器」とは【人並はずれてすぐれた才能・器量。また、その備わった人物。大人物。】という意味です。この書は、現在雑賀幼稚園に掲げられていますが、幼稚園に掲げてあるところに、教育的に大きな意味があると思っています。すなわち、全ての子どもたちには無限の可能性が秘められていると。この 5 文字は「その可能性を見出し、大きく育てていくことが教育に携わる者の使命ではないか」そう問いかけている気がします。

本校開校 100 周年、分校創立 70 周年を迎え、それぞれ次のステージに向けた第一歩として探究学習の進化・深化を通して、全ての生徒の可能性を後押ししていきたいと考えています。本校・分校は今年度、両校そろって文部科学省が行う「高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）」の指定校になりました。本校はさらに『『総合的な探究の時間』の質向上を図るための実践研究』事業の指定も受けました。これらの事業を有効に活用し、生徒の皆さんが、より進んだ深い学びを実現できるよう探究学習の充実に努めていきたいと考えています。

「三刀屋が丘」「さながの丘」がそれぞれ“学びの丘”となり、地域を支える人材の輩出に貢献できるよう教育活動を進めてまいります。今後とも三刀屋高校・掛合分校の教育活動に一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

※「高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）」

○高校段階におけるデジタル等成長分野を支える人材育成の抜本的強化

○情報、数学等の教育を重視するカリキュラムを実施するとともに、ICTを活用した文理横断的な探究的な学びを強化する学校などに対して、取組に必要な環境整備の経費を支援

※『『総合的な探究の時間』の質向上を図るための実践研究』

○日本社会が抱える現代的な諸課題に関する課題を設定し、探究活動の取り組む実践研究

○「総合的な探究の時間」の質向上に取り組むことで、高校生の主体的に社会の形成に参画する意欲・態度の育成



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【7月号②】令和6年7月23日



■ 展覧会の絵—1学期終業式にて—

1学期も今日で終わりです。令和6年度も3分の1が終わろうとしています。4月の始業式では、今年度の合言葉「向き合う。その先に…Face it. Beyond that…」とともに、自分自身の中に顔をのぞかせている新しい芽を自分なりの方法で少しずつ大きく育てながら自己表現していったほしいという話をしました。また、入学式では、自己を表現する方法を見つけてほしいという話をしました。皆さんが部活動や学校行事、あるいは授業等学校内外の活動において“自己表現”ができるよう、私たち教職員も「自己表現のできる環境づくり」を今年度の重点目標の一つに掲げています。改めて言いますが、自己を表現する方法は、発表したり文章を書いたりすることだけではありません。



90回記念東光展

リンゴのうち

高橋健一

部活動においてスキルアップを図ること、作品の制作をすること、あるいは自分の趣味や特技を深めていくことも自分を表現していく方法につながります。先生方にも、日々の授業においても生徒の皆さんが“自己表現”できる機会がもてるような授業の工夫をお願いしています。1学期が終わろうとしている今、自分なりの方法で自己表現ができているかどうか、自己表現につながる自分のストロングポイントは何だろうか、と自分自身に問いかけてみてください。

先日、島根県立美術館で開催された『90回記念 東光展』という展覧会を訪ねました。そこには100点を超える油絵や版画が展示されていました。入口付近で目を引いたのは、明るい色調の油絵でした。美術を担当する高橋健一先生の作品です。高橋先生は、これまでも海水浴やシャボン玉遊びなど毎回“家族愛”をテーマにした作品を数多く出展されていますが、遠くからでも高橋先生の絵とわかるほど作風が確立されているものです。鮮やかな青色が印象的ですが、聞けばこの作風に至るまでには“青の時代”の前に“黄色の時代”もあったと笑いながら話していらっしゃいました。（ちなみにこの表現は“20世紀最大の芸術家”と言われるスペインの画家パブロ＝ピカソが試行錯誤を繰り返した時期を表す“青の時代”や“薔薇色の時代”を意識したものです。）完成までには、構図からデッサン、色付けまで数か月を要するそうですが、描き始めてからも構図を変えたりするなど多くの紆余曲折があるとのこと。その過程を経てたどり着いた作品には高橋先生の“自己表現”が凝縮されていて、高橋先生の家族への思いがしっかりと伝わってきます。

展覧会には実に様々な作風の作品が並んでいました。人物や静物、風景等題材は様々で、色使いもそれぞれ異なっています。中には写真のような写実的なものもありました。しかし近づいて観ると一筆一筆絵の具が置いてあります。その一筆一筆の思いが、少し離れて俯瞰してみたときに一枚の絵となって、見ている者に感動を与えてくれます。そこには、写真とは違ったある種のぬくもりを感じます。

皆さんの心のキャンバスにはどんな絵が描かれていますか。色使いや描き方は人それぞれで

す。一筆一筆を一日一日あるいは一瞬一瞬と置き換えて、まずは自分の心のキャンバスに思いや願いといった様々な“感情という名の絵の具”を置いてみてはいかがですか。

生徒の皆さんが充実した夏休みを過ごし、2学期始業式に元気な姿を見せてくれることを願っています。

【高橋健一先生の作品（ご提供いただいたものです）】



第88回東光展 シャボン玉 会員賞 高橋健一



第89回東光展 遊 上野の森美術館賞 高橋健一



第8回日展(2021) 夏の日 高橋健一



第8回日展(2021) 夏の日 高橋健一



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【8月号】令和6年8月28日



■「ディヴェルシテ diversité」と「コンコルド concorde」－2学期始業式にて－

※始業式当日は写真を示しながら講話を行いました。本稿には掲載していません。

皆さんおはようございます。この夏も猛暑・酷暑の日々が続きましたが、心身とも健康に過ごせましたか？県内外で事故等のニュースが報じられますが、人の命は何よりも重く尊いものです。少しでも心が弱くなったなあと感じたら誰かに話してみてください。きっと親身になって話を聞いてくれますよ。

夏の甲子園では、大社高校が93年ぶりのベスト8進出を果たし全国に旋風を巻き起こしました。同じ島根県の公立高校生の活躍は、島根県に暮らす私たちにも自信と勇気を与えてくれました。この夏は地域の方々とお話をする機会が多くありました。「掛高生が地域の行事に参加してくれて地域に元気が出た」「町ですれ違う時明るく挨拶をしてくれる」など皆さんへの感謝を伝える言葉を数多くいただきました。皆さん一人一人も地域に元気を与えてくれる、大事な存在なんだと改めて感じました。

7月から8月にかけてはパリオリンピックが開催されました。多くの競技に参加している日本選手の活躍に一喜一憂しながら応援し、寝不足の日が続いた人もいるでしょう。そのパリオリンピックでは「多様性」や「調和」といったテーマが設定してありました。フランス語で言うところの「ディヴェルシテ diversité」「コンコルド concorde」です。コンコルドは開会式の際に登場した広場の名前でもありますね。このコンコルド広場は、マリー・アントワネットやルイ16世が処刑された広場としても有名です。

多様性
diversité
(ディヴェルシテ)

調和
concorde
(コンコルド)

ところで、この写真はパリオリンピックに出場したフランスチームのメンバーです。一方こちらはスペインチームのメンバーです。何か気づくことはありますか？じゃあ隣同士で意見交換を、と授業ならそうなるところかも知れませんが（笑）。どうですか？・・・そうですね。フランスは様々な人種・民族によりメンバー構成がなされています。フランスは移民も多く、多民族国家となっています。「多様性」や「調和」を重視する背景がそこにあります。開会式にも登場したフランスの元サッカー選手ジダンさんもアルジェリア系移民の子孫です。ちなみに日本チームのメンバーはこちらです。これからの社会では、外国籍の方と一緒に活動したり、仕事をしたりする機会も増えてくることでしょう。国際化が進んでいくことで、物事に対する認識の度合いに差が出てくることも予想されます。日本国内で行われる漢字で書く「柔道」と国際大会で行われるアルファベットで書く「JUDO」とは競技に対する認識が微妙に異なっていると感じますよね。

対話をとおして“わかりあえる”点と“わかりあえない”点を確認した上で、妥協点を見出しながらより高い次元に引き上げていく、それが目指すべき理想の姿といえます。喜び方や悔しがり方にだって、多様性が認められていいのかもしれない。

「多様性」と「調和」は、これからのボーダーレス社会を生きていく私たち全てにとって考えていくべきテーマといえます。自分を表現できるものは何か？自分のストロングポイントは何か？をじっくり考えながら高校生活を過ごしてください。どうか狭い世界に縮こまらず、若いうちに多くの価値観と出会い、広い視野を持って自分の人生に向き合ってください。

最後に、この飛行機を知っていますか？超音速旅客機コンコルドです。そう「調和」を意味するあのコンコルドです。フランスとイギリスが共同で開発し、1976年に運用が開始されニューヨーク・ロンドン間が5時間かかるところを3時間弱で飛ぶという、まさに超音速・マッハ2の速度を記録した飛行機です。ただ、燃費の悪さや定員の少なさから採算が合わず、墜落事故の発生もあり2003年に営業飛行を終了しました。実は開発当初から、採算が合わないことを開発者たちは知っていました。それでも、せっかくここまで来たんだからと開発をやめることができませんでした。これは「コンコルド効果」または「コンコルドの過ち」と表現され、経済学や心理学の分野でも用いられる言葉となっています。どこまでやってみるのがいいのか、どこでやめるのがいいのか。物事の判断は難しいですが、時に思い切ってやり方を変えてみるというのもありかもしれませんね。

2学期も多くの行事が予定されています。体調管理に気をつけて充実した毎日を過ごしましょう。以上で終わります。



■置かれた場所で…

以前『置かれた場所で咲きなさい』（渡辺和子著 2017年 幻冬舎）という本がベストセラーになりました。「置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです。時間の使い方は、そのままいのちの使い方です。自らが咲く努力を忘れてはなりません。雨の日、風の日、どうしても咲けないときは根を下へ下へと伸ばしましょう。次に咲く花がより大きく、美しいものとなるように。心迷うすべての人へ向けた、国民的ベストセラー。」（幻冬舎HPより）という内容です。

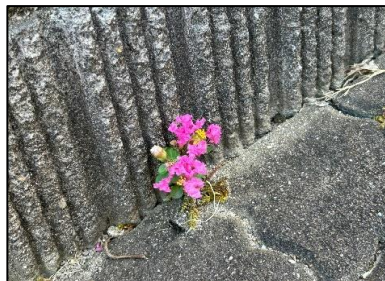
ついその本のことを思い出しました。私の自宅と隣家、それぞれの玄関付近のコンクリートの隙間に“置かれた場所で”咲いている花を見つけました。自宅に咲いているのはキングヨソウという花で、昨年鉢植えをしていた苗から種が落ちたものだと思います。隣家で花を咲かせているのはサルスベリです。サルスベリは挿し木で増やすのが一般的で、種はあまり馴染みがないように思われますが、夏の終わりに実を結び、実の中にある種は風によって運ばれやすい形をしています。隣家の庭先にはサルスベリの木が植えてあり、そこから種が風によって運ばれたものであると思われる。

植物は、繁殖戦略として風や動物に運ばせるなどあらゆる方法で種を拡散させていきます。その戦略としては“あり”だと思いますが、そこに落とされた種の身になって考えて見れば「もっといいところに落としてよ」という感じでしょうか。直面する不遇な境遇を恨めしく思う気持ちも湧いてきそうです。よく耳にする“～ガチャ”と言えるかもしれません。しかし、見た目はコンクリートに覆われた厳しい条件下のように思えますが、コンクリートの下には土があり、考えようによっては他の雑草に邪魔されない好条件といえるのかもしれません。しかも、そのような一見厳しい条件のもとで“頑張って”花を咲かせていると、周囲から応援してもらえることもあるでしょう。私も毎日コンクリートの隙間に水やりをしています。

今置かれている状況をネガティブにばかり考えるのではなく、真摯に向き合いながら少しでもポジティブにとらえていけば、案外打開策が見い出せるかもしれません。そこに咲く花は、逆境であればあるほど美しく見えるものです。そして、そんなあなたを応援してくれる人が必ずいるはずです。ただ、本当につらい時は我慢せず誰かに頼る勇気も忘れずにね(^^)／



☞自宅のキングヨソウ



☞隣家のサルスベリ



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【9月号②】令和6年9月20日



■坂道を歩き、階段を上る。その先に…

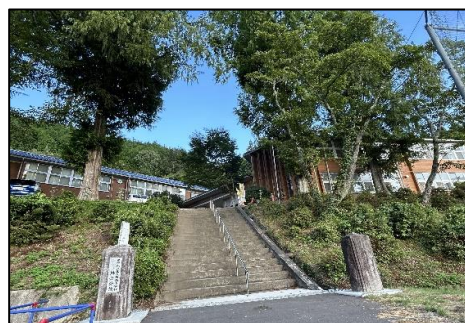
※本稿は『かけこう』（令和6年9月20日発行）を加筆修正しています。

猛暑・酷暑と表現されたこの夏も、9月に入り朝夕は涼しい風を感じられるようになり、学園歌にある「さ霧清らに」の情景にふさわしい季節となってきました。掛高生は、登校日には毎朝校舎のそびえる佐中の丘に向かって登校してきます。佐中神社辺りの標高は約205m、校舎が位置するのは約220m。つまり15mほどの高低差を毎朝上ってくるわけです。途中まではなだらかな坂が続きますが、最後は22段の階段が現れます。この階段を上り切って初めて校舎にたどり着けます。階段を一段一段踏みしめながら上ってくる姿を見る度に、一步一步努力を積み重ねながら自分の目標に向かって歩を進めていく掛高生の姿を重ね合わせています。歩くペースは一人ひとり異なっているかもしれませんが、時には休憩することも必要です。ゆっくりでも少しずつ進んで行けば必ず目標にたどり着けます。目標にたどり着く直前には何かしらの困難が待ち受けていることがあるかもしれません。そんな時、掛高の登校路を思い出してもらいたいのです。坂道をゆっくり歩き、階段を一段一段上るように自分の目標に向けて一步一步進んでください。急ぐ必要はありませんよ。

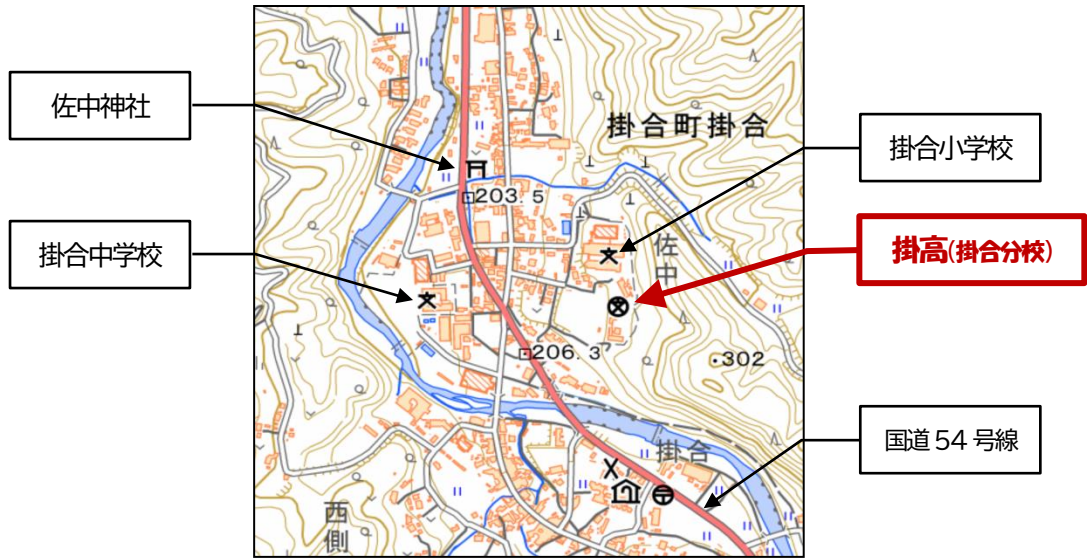
体育祭や文化祭などの学校行事の際、あるいは夏休みや冬休みといった長期休業中には、卒業生の皆さんが懐かしい顔を学校にのぞかせに来てくれます。就職や進学等それぞれの道を歩んでいる皆さんが、私たち教職員に近況報告をしてくれたり在校当時の思い出に花を咲かせたりしてくれます。それは単なる世間話の延長のようにも見えますが、中には「話を聞いてもらいたい」とか「今少し悩んでいるんだけど」という理由で分校を訪れてくれる皆さんもいると思います。ここに休みが欲しいなあと感じた時は、いつでも分校に遊びに来てください。分校で過ごした日々を思い起こすことで、自分の現在地を再確認できるのではないのでしょうか。

「掛高には『本物』がある」を掲げ、地域の皆様からのご支援・ご協力を受けながら掛高が実践してきた「本物の少人数教育」「本物の地域密着」—これらの教育活動を通して獲得した知識や経験は、きっとそれぞれの人生を歩んでいく掛高生の道しるべになるはずです。そして卒業後も掛高が“心のよりどころ”と思ってもらえるような場所でありたいと思っています。

(ある日の登校風景)



【掛高（掛合分校）周辺】



(地理院地図より作成)



■金継ぎ—リサイクルからアップサイクルへ—

「金継ぎ（きんつぎ）」という言葉をご存じでしょうか？

「金継ぎ」とは陶磁器の破損部分を、漆を用いて修繕・修復する日本古来の伝統工芸の一つです。接着剤の代わりに漆を用い、その漆に金粉を混ぜることによって修繕・修復後の接着面が金色に装飾されるものです。私にこの言葉を教えてくださったのは、本校警備員のHさんです。Hさんはよくレギュラーコーヒーを淹れてくださるのですが、コーヒーだけでなく陶磁器にもご造詣が深く様々な窯元のカップに淹れてくださいます。ある時、カップの持ち手に割れ目が入っているのを見つけて「金継ぎで直しますからしばらく代わりのカップにしますね。直すのには結構日にちがかかるんですよ。」と言われました。私にとっては初めて聞いた言葉だったので、「金継ぎ」の方法等について詳しく教えていただきました。気のせいか、その日以降メディア等でも「金継ぎ」という語によく接するようになりました。



2000年に公布された「循環型社会形成推進基本法」では、3R「リデュース（Reduce・発生抑制）・リユース（Reuse・再使用）・リサイクル（Recycle・再生利用）」の重要性が提言されました。「金継ぎ」は一見リユースに該当されるように感じます。しかし、製品の壊れた部分を魅力的に修繕・修復して再利用できるようにする「金継ぎ」は、単なるリユースではなく新たな価値を与えて再生すること、つまり“クリエイティブ・リユース（創造的再利用）”と言えます。もちろん、一度資源に戻して製品をつくり直すリサイクルとも異なります。似たような言葉にリメイクもありますが、“より価値を高めた再利用”が重視されている点において異なっています。このように「金継ぎ」は製品自体に付加価値を与えているため“アップサイクル”と表現されることもあります。そして「金継ぎ」は、持続可能な社会の実現を目指す世界共通の目標であるSDGsの17ゴールのうち、ゴール12「つくる責任 つかう責任—すべての人の意識と行動をシフト」にも好事例として取り上げられています。



壊れてしまった箇所を、修繕・修復することによって以前よりも価値のあるものにしていくという“金継ぎ的”考え方は、どこか筋肉トレーニング（筋トレ）にも通じるところがあると思ったりもします。負荷によりダメージを与えられた筋繊維は、プロテイン等に含まれるたんぱく質やアミノ酸の摂取により修復され、以前より強固な筋肉になっていきます。もっとも、修復された筋繊維自体は外から見えないので「金継ぎ」とは少々ニュアンスが異なるかもしれませんが…。筋トレは、意図的に筋繊維を壊してより強固な筋肉をつくりあげようとするのですが、私たち

壊れてしまった箇所を、修繕・修復することによって以前よりも価値のあるものにしていくという“金継ぎ的”考え方は、どこか筋肉トレーニング（筋トレ）にも通じるところがあると思ったりもします。負荷によりダメージを与えられた筋繊維は、プロテイン等に含まれるたんぱく質やアミノ酸の摂取により修復され、以前より強固な筋肉になっていきます。もっとも、修復された筋繊維自体は外から見えないので「金継ぎ」とは少々ニュアンスが異なるかもしれませんが…。筋トレは、意図的に筋繊維を壊してより強固な筋肉をつくりあげようとするのですが、私たち

の日常生活全般に目を向けると、予想しない悩みや思わぬ失敗などにより傷ついてしまうということも数多くありますよね。長い人生、生きていけば大なり小なり失敗することがあります。そのような時、この“金継ぎ的”思考を取り入れてみてはどうでしょう。「失敗に向き合いながら修復・修繕を続けていくことで次回の成功につなげ、逆に自分のストロングポイントに変えてしまう」といったことです。外面的なことばかりではありません。目には見えない部分にもあてはまります。共通するのは、壊れたものを全否定せず肯定しながらより価値のあるものにバージョンアップしていこうという思考です。

今ある自分を肯定しながら、より価値のある自分にゆっくりじっくりバージョンアップしていけばいいですね。「金継ぎ」は、長い期間を費やしながら行う作業です。

慌てない慌てない。それが何より大事です。



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』 【11月号】 令和6年11月12日



■「私には夢がある」—I Have a Dream.—

猛暑、酷暑と表現された夏は過ぎましたが、今年最大の満月「スーパームーン」翌日（10月17日）にもまだ夏日を記録するなど、なかなか秋らしさを実感しにくい天候が続きました。それでも、次第に冬をも意識させられるような季節となってきました。

今年度も半分が終わりました。1学期には遠足や体育祭、2学期には球技大会や研修旅行などの学校行事、また地域に出かけての探究活動・体験活動も数多く実施してきました。その都度生徒の皆さん一人一人の充実感や満足感にあふれた表情や姿を目にすることができました。今年度重点目標の一つに「自己表現のできる環境づくり」を掲げ、部活動や行事への参加、生徒会や生徒発の活動の推進など生徒主体の活動の活性化、活躍の機会や場の創出と積極的発信をその具体策としてあげています。学校ホームページや『かけこう通信』では、生き生きとした活動の様子や成果を紹介しています。ご覧いただき、生徒の皆さん一人一人の“自己表現”の一端を感じとっていただければと思います。

さて、タイトルに示した「私には夢がある」I Have a Dream.とは、1963年8月28日にアメリカ合衆国の首都ワシントンD.C.でマーティン・ルーサー・キング・ジュニア博士が行った演説に繰り返し登場するフレーズです。キング博士の“夢”とは、あらゆる民族あらゆる出身のすべての人々に対する自由と民主主義の実現でした。彼は平等な公民権を保障する法律の制定を求めて奔走し、1964年にはこの功績が認められノーベル平和賞を受賞しています。

ひるがえって、私自身はこれまで“夢”について語ってきたであろうか？キング博士のような壮大な“夢”を語ることはできないが、自分の中に“夢”を抱いて生きてきたであろうか？そう自問自答しました。契機となったのは、ある研修でのアイスブレイクでした。研修講師の方から「今日の研修を始める前にお互いに自己紹介をしてもらいます。その際、『私には夢がある』と最初に言い、ご自身の“夢”を交えながらお話してください。」と言われました。その時は、文字どおり“夢”のような話でお茶を濁した感じでしたが、研修後に改めて思い返してみました。思い起こせば、最初に“夢”について語ったのは保育所の育了式の時だったと思います。少人数の小さい保育所でしたが、保護者の前で一人一人が「大きくなったら」と題して画用紙に絵を描き、将来の“夢”について発表しました。私は、「大きくなったら土木作業員*になりたい！」と言ったことを鮮明に覚えています。父親が建設関係の仕事に携わっており、子どもなりに父親を尊敬していたのだと思います。成長するにつれ就きたい職業は変わり、中学・高校の頃には教職に就くことを目標として過ごしていました。しかし「教職に就くこと」自体を“夢”と捉えてはいなかったように思います。「こういう教師になりたい」とか「教師になってこうしたい」という思いはありましたから、むしろこちらの方が“夢”に近かったと言えるかもしれません。“夢”とは単に目指す職業に就くことではなく「将来実現させたいと思っていること」であると言えるのではないのでしょうか。就きたい職業を選択した上で「こんな〇〇を目指したい」「〇〇になってこういう形で社会に貢献したい」とか、逆に「こういう形で社会に貢献したいから〇〇に就きたい」といった

考え方です。さらに言えば「実現させたい」というのは、実は自分自身のことであり、“夢”とはつまり「自己実現を目指すこと」と置き換えることもできるでしょう。

掛高では「掛高には『本物』がある。」というキャッチフレーズを掲げ、本物の少人数教育と本物の地域密着を両輪として教育活動を進めています。「学び直し」「進路実現」「地域探究」「交流・発信」のキーワードのもと、生徒の皆さん一人一人の自己実現につながるようなプログラムを用意しています。

生徒の皆さん一人一人が「なりたい自分になるために」「自分はこうありたい」という“夢”を語れる人になれるよう私たち教職員も全力で支援していきたいと思っています。

さて「私には夢がある」、皆さんはこのフレーズの後にどんな言葉を紡いでいきますか？

＊当時は別の表現をしましたが、今回はこの表現にしています。





■柿と銀杏—畏友—

今年の夏は酷暑となり秋以降も暑さが続いたせい、柿が不作とのこと。冬の風物詩となっている干し柿も、秋以降の高温のせいで腐ってしまい例年ほどの出荷量が見込めないという報道もよく耳にします。ところで、“柿”と聞くと頭に浮かぶのは

「柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺」
ほうりゅう じ

という俳句ではないでしょうか。一柿を食べていたら、法隆寺の鐘が鳴った。柿の味。鐘の音。秋のひんやりした空気。いろいろな感覚が伝わってきます。(NHK for School)

この句は、1895年11月に正岡子規が故郷松山から東京に向かう道中の奈良県で詠んだ句といわれています。ただ、実際には法隆寺を眼前にはしていなかったといわれています。

一方、この俳句をご存じでしょうか。

「鐘つけば 銀杏ちるなり 建長寺」
いちろう けんちよう じ

建長寺は神奈川県鎌倉市にある古刹（古いお寺）ですが、どこか「柿くへば～」の句と似ていますね。子規の句を真似してつくったのではないかという感じもします。

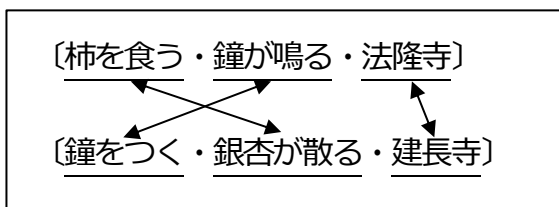
この句は夏目漱石が詠んだ句で、1895年9月につくられています。つまり「鐘つけば～」の句の方が「柿食へば～」の句よりも2か月ほど前につくられているのです。ということは、子規の方が真似したと考えることもできますね。



▲本校グラウンド西側の銀杏



▲本校体育館に向かう坂道の銀杏



子規と漱石は同じ年で東京大学の同期でもあります。2人はお互いの才能を認め合う生涯の友となります。その後、子規は肺結核を患い大学を中退、新聞記者となりますが、療養のため松山に帰郷します。子規は、漱石の勧めもあり、中学教師として松山に赴任していた漱石の下宿先である愚陀仏庵で52日間を過ごします。「柿くへば～」の句は、子規が松山を発ち東京へと向かう道中でのものです。漱石の「鐘つけば～」の句を意識したいわば“返歌”としての句ともいえます。漱石の句は、意外性がないなど評価が低かったといわれていますが、子規としては松山での療養を勧めてくれた漱石への感謝の意を込めながらも、俳句界の第一人者としての矜持から「君、こういう具合に詠んだ方がよりいい句になるよ」と言っているようにも思えます。そこには、子規と漱石とが互いをリスペクトしながら、さらなる高みを目指していこうという畏友（尊敬している友人）の関係性を垣間見ることができます。

柿と銀杏—秋深くなると二人のことを思い浮かべます。



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』 【12月号】 令和6年12月10日



■「米騒動」

この夏は全国で米が品薄となり、店頭から米が消える「令和の米騒動」と呼ばれる現象が起きました。「令和の米騒動」は、今年の流行語大賞の候補にまでなりました。米騒動と呼ばれる現象は歴史上何回かあるでしょうが、もっとも有名なのは第一次世界大戦後の1918（大正7）年に起きたものです。当時、米の価格は約3倍にまで跳ね上がり社会不安が増大しました。

米の消費量は年々減少してきているものの「令和の米騒動」という言葉を耳にすると、米はまだまだ主食として重要な地位にあるということを実感しました。

ところで大正時代だけでなく、昭和にも米騒動があったのをご存じでしょうか？唐突ですが、次の問題を解いてみてください。

【1】 4点 $A(1,3)$, $B(5,8)$, $C(0,0)$, $D(12,0)$ がある。線分 AB 上の動点 P と線分 CD 上の動点 Q に対し、線分 PQ の中点を S とする。このとき点 S の存在する範囲は、4点

$$K\left(\frac{5}{2}, \text{アイ}\right), L\left(\frac{1}{2}, \frac{\text{ウエ}}{\text{オ}}\right), M\left(\frac{\text{カキ}}{\text{ク}}, \frac{3}{2}\right), N\left(\frac{\text{ケコ}}{\text{サ}}, 4\right)$$

を頂点とする四角形の周および内部である。そして四角形 $KLMN$ の面積は シス である。

【注】問題中のア～スには、「- , ±, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, * (該当なし)」のいずれかが入ります。

いかがでしょうか？この問題は、1985（昭和 60）年実施の共通一次試験（現在の大学入学共通テスト）「数学Ⅰ」（本試験）です。当時も解答はマーク式でしたので、ア～スには符号・数字・記号をマークしていくわけですが、ここで受験生を困惑させる出来事が起きました。前年まで選択することがなかった「*」（該当なし）が最初の問題から登場したのです。該当年の共通一次試験を経験した方にお話を伺うと、会場のあちこちから「えっ」「えー」という声が聞こえてきたとのことでした。当時は、「*」を選択＝誤答で、自身の計算間違いか勘違いを疑いなさいといった感じでしたから、受験生の多くは何度も何度も計算をやり直したことと思います。結局この年の「数学Ⅰ」には21か所で「*」の選択があり、「*」を米印に見立てて、のちに「昭和の米騒動」と呼ばれることとなりました。

「受験問題は簡単だ。必ず正解があるから。実社会に出たら正解がないことだってある。」という人がいます。ただ、“正解がある”受験問題であっても「アイ」には必ず2桁の数字が入るはずと思い込んでいると、自分の出した答えが不正解ではないかと思い、何度も何度も考え直すこととなり、なかなか正解にはたどり着けません。しかし、この思い込みの部分を柔軟に考えることができれば、案外簡単に正解にたどり着けることもあります。

【「アイ」≠2桁】を、実社会での「既成概念」に置き換えて考えてみると、日常生活においても新しい局面が展開できるかもしれませんね。

【問題の解答】

アイ 4 * ウエ 3 * オ 2 カキ 13 ク 2 ケコ 17 サ 2 シス 15

【注】「共通一次試験」（正式名称は「大学共通第1次学力試験」）とは、1979～1989年までの11年間にわたり実施された基礎学力試験。1990年からは「大学入試センター試験」（正式名称は「大学入学者選抜大学入試センター試験」）、2021年からは「大学入学共通テスト」（正式名称は「〇年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト」）と名称が変更（実施科目・配点等も）されました。ちなみに選択記号「*」は、「大学入試センター試験」への移行を機に廃止されています。



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』【12月号②】令和6年12月20日



■みえるものからみえないものを

昨日は3年生課題研究発表会でした。発表した3年生の皆さん、進行を担当した2年生の皆さんお疲れ様でした。皆さん一人一人のテーマが多岐にわたっていてとても興味深くきかせていただきました。人前で話すのって緊張するよね。皆さん堂々とした発表姿勢で立派でしたよ。見学されていた地域の皆さんも、皆さんの成長した姿をほめていらっしやいました。

2学期終業式を迎えました。年度としてはまだ3学期が残っていますが、2024年は残り10日余りとなりました。掛高は、地域や台湾研修旅行における皆さん一人一人の活躍や、演劇同好会OBの曾田さんの活躍などにより県内外でも有名な学校となっています。皆さん、掛高生徒として自信を持って過ごしていきましょう。

さて、改めて2024年はどんな年だったでしょうか？うるう年の今年、世界的にはパリオリンピック・パラリンピック開催、アメリカ大統領選挙実施、日本では石破新内閣誕生など多くの出来事がありました。思い返せば、2024年の始まりは元日の石川県能登半島での大地震発生でした。被災地は、9月の豪雨災害も重なり未だ復興にはほど遠い状況です。1年が経過しようとしている今、改めて私たちがすべきことを考える必要があります。

「天災は忘れられたる頃来る」という警句があります。この警句は、物理学者で随筆家の寺田寅彦（てらだ・とらひこ 1878（明治11）年11月28日～1935（昭和10）年12月31日）氏が発したものです。寒さが一段と厳しくなり本格的な冬を迎えるこの時期には低温・大雪による災害や火災等も多く発生します。年末に向け身の回りの安全を再確認しながら、万が一を想定しその想定範囲を広げておくことが重要です。

ところで、寺田寅彦という人物は、中学校まで高知市で過ごし、中学卒業後は熊本県の第五高等学校（現在の熊本大学）に入学し、そこで英語教師を務めていた夏目漱石と出会います。寺田は漱石を師と仰ぎ、漱石もまた寺田を教え子として可愛がり、

『吾輩は猫である』に登場する苦沙弥先生の元教え子で「地球の磁気」を研究している水島寒月（みずしま・かんげつ）や

『三四郎』に登場する理科大学の教師で光線の圧力の研究をしている野々宮宗八（ののみや・そうはち）のモデルとされています。高知城の近くに建てられ



ている寺田の銅像の台座には「ねえ君ふしぎだと思いませんか」と刻まれています。こちらがその銅像ですが、彼が右手に持っているものは何だと思いませんか？それは椿の花です。彼は「椿の

花の落ち方」について論文を書いています。その研究テーマは、椿の花はなぜ上を向いて落ちていくのかです。研究のきっかけとなったのは、漱石の詠んだ「落ちざまに虻^{あぶ}を伏せたる椿哉^{かな}」という句です。この句は、椿が下を向いて落ちていて、さらに虻^{あぶ}の上に覆いかぶさっている情景を読んだ句です。なぜ椿の花が下を向いて落下しているのか？彼は虻^{あぶ}が椿の花の蜜を吸うことに夢中となっている間に一緒に落下してしまった。虻^{あぶ}のせいで花の重心が変わり下を向いて落下したとの仮説を立て、観察・実験・方程式による計算を繰り返したそうです。このあたり、皆さんが取り組んでいる探究活動に通じるものがありますね。そして、その成果を地震の発生メカニズムの研究にまで応用しています。日常接している何気ない（と思っている）ことに対して「どうしてかな？」という疑問を持つことは、自分自身の視野を広げていくことにつながります。当たり前と思われていることほど、実は奥が深い場合もあります。はじめに、寺田寅彦は物理学者で随筆家と紹介しました。物理学は理系で、随筆は文学だから文系といえますよね。寺田寅彦は、文系・理系の枠を超えて探究を進めるSTEAM教育*の先駆けであると言えるでしょう。狭い専門性にとらわれずあらゆるものに“ふしぎ”な思いをもって接することにより、探究の幅も奥行きも広がっていくと思います。

では一枚の写真を提示します。“ふしぎ”なところはないですか？

（終業式当日は、北海道の家屋の写真を提示して“ふしぎ”に感じる点をあげてもらいました。）

もう1枚写真をお見せします。写真手前から奥に向かって歩いているとします。どの方角に向かって歩いているのでしょうか？

年末年始は、親戚や家族との交流の機会が多くあったり、旅行に出掛けたりすることもあると思います。これまで何気なく見過ごしてきたモノやコトに“ふしぎ”な思いをもって接してみてはいかがですか？そして、おうちのお手伝いや団らんの時間も大切にしながらよい冬休みを過ごしてください。Have a nice winter holiday!

最後に、昨年と同じこととお話しします。何事も当事者になって見ないと実感がわかないものですからね。

それぞれの目標に向けて焦りながらも懸命に努力を続けている皆さん、物事が順調に進まなくて落ち込んでいる皆さんへ、この言葉を贈ります。

Everything will be okay in the end. If it's not okay, it's not the end.

「最後にはすべて上手くいくよ。もし上手くいっていないのなら、それは最後ではないということ。」 John Lennon（ジョン・レノン）

*STEAM 教育

理系や文系の枠を横断して学び、問題を見つける力や解決する力をはぐくむ学習。

「STEAM (スチーム)」とは、学問領域である Science (科学)、Technology (技術)、Engineering (工学)、Arts (美術)、Mathematics (数学) の頭文字を並べたもの。

参考資料：「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 第120回」

(2020年9月24日(火)) 配布資料

https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_kyoiku01-000009959_4.pdf

■終業式当日に使用したスライド (一部)





島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【1月号】令和7年1月8日



■Beyond—その先に—

1月1日に、石川県能登地方で教員をしている知人から年賀状が届きました。そこには被災地の数枚の写真とともに、次のような言葉がありました。「2024年1月1日。忘れられない日になりました。その数日後、被災した校舎の窓から見えた虹が私に元気をくれました。新しい1年が始まります。たぶん、当たり前が始まると思っていますが、その「当たり前」は、そうでないこともある…を味わった今は、私は私だからと、今まで通りにいこう！と開き直って生きていきます。」

2025年を迎えました。1月1日の午後4時10分は、あれから丸1年が経過した時刻でした。石川県輪島市で行われた追悼式の様子や被災地の現状を見るにつけ、胸にこみあげてくるものがあります。まだまだ様々な支援が必要であることを痛感するとともに、今だからできることもあるはずとの思いを強くしました。

皆さんはこの年末年始にどんなことを思い、あるいは考えながら過ごしましたか？みえないものがみえた—そんな瞬間はありましたか？昨年度から皆さんにお話しさせていただいている合言葉『向き合う。その先に…』そして副題の英文『Face it. Beyond that…』最近、この英文に使用している『Beyond』という英単語をよく耳にします。大手都市銀行、スポーツ専門のビデオ・オン・デマンド・サービス会社、車用品会社のCMなどでも使われています。また、昨年公開のディズニー映画『モアナと伝説の海2』では「越えてゆこう、どんな運命が待っていても——」のテーマに合わせた劇中歌（「ビヨンド～越えてゆこう～」）にもなっています。そこには、コロナ禍による生活様式の変化や閉塞感漂う空気の中、現状を打破して少しずつ前に進んで行こうという社会の流れがあるのかもしれません。

大リーグのマリナーズ、ヤンキースなどで活躍し、2019年3月21日に現役引退を発表したイチローさんは、その引退会見で「生き様でファンの方に伝わっていたらうれしいことは？」という質問に対して次のように答えています。「生き様というのは僕にはよく分からないですけど。生き方という風に考えれば、人より頑張るなんて事はとてもできないんですよ。あくまでも秤は自分の中にある。それで自分なりに、その秤を使いながら、自分の限界を見ながら、ちょっと超えていく。ということを繰り返していく。そうするといつの日かこんな自分になっているんだっていう状態になって。だから少しずつの積み重ねが、それでしか自分を超えていけないと思っているんですよ。一気に高みにいこうとすると、今の自分の状態とギャップがありすぎて、それを続けられないと僕は考えているので。地道に進むしかない。進むだけではないですね、後退もしながら。ある時は後退しかない時期もあると思うので。でも自分がやると決めたことを信じてやっていく。でも、それは正解とは限らないですよ。間違ったことを続けてしまっていることもあるんですけども。でもそうやって遠回りをすることでしか、本当の自分に出会えないというか。そんな気がしているので…（後略）」

新年を迎えた今、改めて今の自分の中にある秤を使いながら自分の限界を確認する作業から始めてみませんか？その限界をちょっと超えていこうと繰り返すなかで、自分の知らなかった“本当の自分”に出会えるのかもしれません。

『**Beyond**』―「その先に」「越えてゆこう（超えてゆこう）」というのは口で言うほど簡単なことではありません。しかし、簡単ではないからこそキャッチコピーとして士気を高めているともいえます。仲間とともに「その先に」「越えてゆく（超えてゆく）」そんな考え方もいいですね。

3学期は、各学年の皆さんにとって1年間を締めくくる大切な時期です。3年生の皆さんは残り少ない高校生活です。高校生活の集大成となる3学期の一日一日を大切にして過ごしてください。



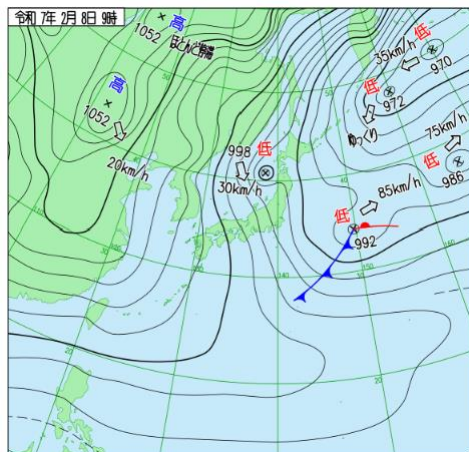
■俯瞰してみること

2月になり、暖冬気分を一掃されるかのような大寒波が襲来しました。7日（金）～9日（日）には、氷点下となったり積雪が多くなったりすることもありました。公共交通機関や高速道路は、近年“予防的措置”のもと早めから運休や通行止めを行うことも多くなりました。今回も山陽方面へ向かう列車や高速バスは軒並み運休となり、利用者の足に大きな影響をもたらしました。実は私も

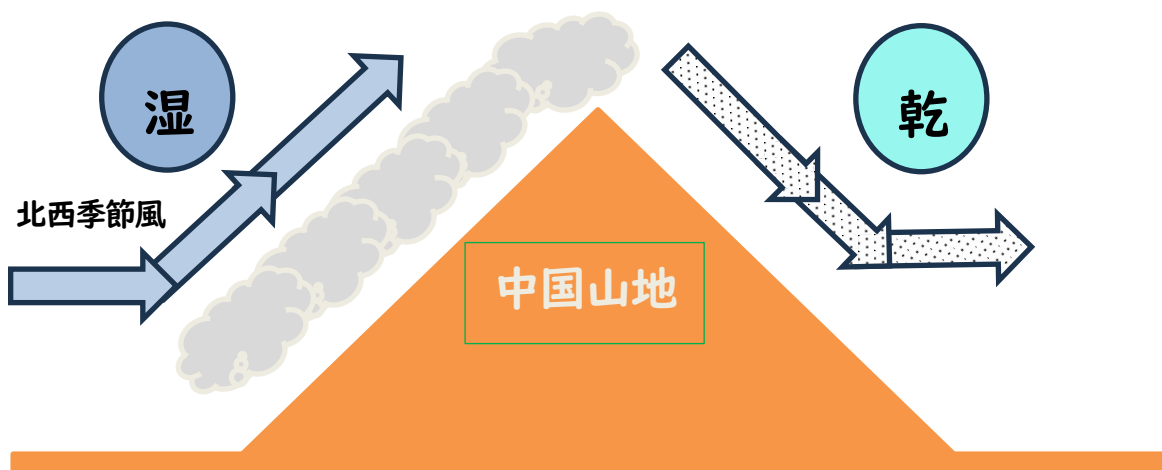
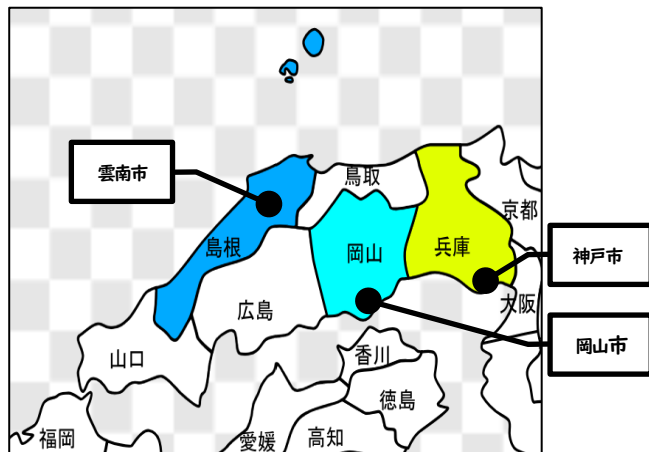
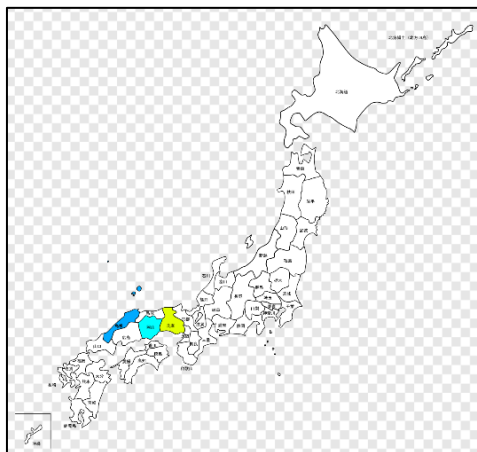
そのうちの一人でした。ちょうどその期間に山陽方面への出張があり、利用予定の列車や高速バスの突然の運休に頭を悩ませながら、何度もチケットの予約確認を余儀なくされました。

天気図を見るとわかるとおり、この期間は大陸からの季節風が日本に吹き付けるいわゆる「西高東低」の気圧配置となっています。山陰地方（日本海側）に住んでいると冬季の降雪・積雪は当たり前のこととっていますが、山陽地方（太平洋側）に住んでいる方々には、雪は降らないけれど気温は低い“冬晴れ”が当たり前のことでしょう。明治時代の小学校の教科書には「日本の冬は気温が低く乾燥しています。子どもたちは凧揚げやコマ回しをして遊びます。」と記述されていたそうです。これは、もちろん太平洋側の冬の様子を記したものですが、日本＝東京という時代を象徴したものといえます。限られた地域だけにいると、そこにある現象等が当たり前と思ってしまいがちですが、少し視点を高くとると地域による差異がわかりやすくなります。つまり、同じ気圧配置でも島根（日本海側）と岡山や神戸（瀬戸内側・太平洋側）では全く異なる風景が広がっていることがわかり、互いに「別世界」を意識することになるでしょう。島根（日本海側）に居住する者からすると、私たちのおかげで岡山や神戸（瀬戸内側・太平洋側）では降雪・積雪がないのですよと言いたい感じかもしれませんが…。

狭い視野で物事をとらえるのではなく、視点を高くもって物事をとらえてみると、つまり俯瞰（ふかん）してみることが意識すると、地域性や特殊性あるいは関係性といったものがみえてくるはずです。広い視野をもって物事を考える意識を持つことが、よりバランスのとれた思考につながっていると思います



気象庁ホームページより



雲南市
(日本海側)

岡山市
(瀬戸内海側)



雲南市三刀屋町(アスパル)

岡山市(岡山駅)

〔いずれも令和7年2月8日(土)〕



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【3月号】令和7年3月1日



■卒業式式辞

先日の大雪を忘れるかのような、ここ数日の暖かい春の日和の中、校舎周辺の桜も春を待ちわびたかのように蕾をふくらませて始めています。

本日は、後援会会長景山俊太郎様をはじめ、多数の来賓の方々のご臨席を賜り、卒業式を挙行することができました。誠にありがとうございます。

昨年度の卒業式は、4年ぶりに多くの来賓の方々をお迎えし、1・2年生も同じ空間で卒業生の晴れ舞台をお祝いするコロナ禍前の形態に戻して挙行することができました。卒業生の皆さんが1年生の時は教室でのリモート参加でしたね。コロナ禍では、式後のホームレームは思い出の詰まった3年教室ではなく、ソーシャルディスタンスをとりやすい講堂で実施した年もありました。皆さんが中学3年生の時の卒業式もコロナ禍の影響を受けて制限のある開催だったことと思います。今こうして、当たり前のように全校生徒・保護者の皆様・そして多くの来賓の皆様とともに、卒業生の皆さんの門出を祝えることはこの上ない喜びです。

来賓の皆様方には、卒業生を様々な面で支えていただきました。重ねて感謝申し上げます。生徒達は、本日高校を巣立っていきますが、これからの人生において向き合うべき幾多の局面があると思います。20年後、30年後の地元雲南市・島根県を支えていく若者達に、地元を愛する先輩として、今まで同様のご支援をお願いいたします。

保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。小学校・中学校の卒業式とはまた違う思いをされている方が多いのではないのでしょうか。4月からは社会人の仲間入りをするお子様、親元を離れて県外に旅立っていくお子様もいらっしゃると思います。3月発行の『PTAカケコ一第50号』には、保護者の皆様から、これまでのお子様との思い出や、これまで伝えることができなかった思いなどが数多く寄せられています。私は卒業式で保護者の方に昨年も同じお願いをしました。今年もそのお願いをします。それは、保護者の皆様には、お子様が巣立っていかれる前に、人生の先輩としてご自身のこれまでの経験の一端を、ぜひ自らの声でお子様に語りかける機会を持ていただきたいということです。学生時代のこと、就職・仕事のこと、転機となった出来事など何でも結構です。生徒たちは、今後自身が向き合うべき多くの局面で必ずその言葉を思い出さずです。保護者としてだけではなく、メンター（助言・指導者）としてお子様を支えていてもらいたいと思います。

さて、卒業生の皆さん卒業おめでとう。そして、皆さんは私にとっても特別な卒業生です。校長として卒業証書を渡す最後の卒業生です。皆さんと、掛高で実施される多くの体験学習や学校行事に参加することがとても楽しく、また多くの活力をもらいました。皆さんは、授業や学校行事などにおいて、常にリーダーシップを発揮して掛高の教育活動を牽引してくれました。私にも気軽に声をかけてくれ、とても嬉しかったです。

掛高は、今や県内外から高い評価をいただく学校となっています。「掛高は教育の原点をいっている学校。教育の原点が現在の教育の最先端ともいえる。」と言ってくれる教育関係者もいらっしゃいます。その掛高を牽引してくてくれたのが卒業生の皆さんです。これまでありがとう。

私は、昨年度から『向き合う。その先に… (Face it. Beyond that…)』を学校の合言葉として、皆さんに「自分自身が抱えている悩みや課題に向き合ってみてはどうですか?」「今の自分を少し超えて、今以上の自分をめざして、今一度自分自身に『向き合って』みませんか?」と問いかけてきました。自分自身に向き合うことは決して楽なことではありません。時には、壁にぶち当たることもあるかもしれません。しかし、日米で野球殿堂入りを果たしたイチローさんは「壁というのは、できる人にしかやっこない。超えられる可能性がある人にしかやっこない。だから、壁がある時はチャンスだと思っている。」と壁の存在をポジティブに捉えています。また、明治初期の自由民権運動家、植木枝盛は「未来が其の胸中に在る者、之を青年と云ふ」「過去が其の胸中に在る者、之を老年と云う」と表現し、未来に向かって挑戦し続ける“青年”的生き方、過去にしがみついて挑戦をためらう“老年”的生き方について述べています。変化が激しく正解を見出しにくい、これからの社会を生きていく皆さんには、これまでの自分に向き合いながらも、未来を志向し自分自身の可能性を追求する“青年”的生き方を目指してほしいと思います。

卒業生の皆さん、これからの長い人生には選択や決断を迫られる様々な局面があると思います。そんな時には、この未来に向かって挑戦し続ける“青年”的思考と保護者から聞いたリアルな経験談を思い出して、直面する課題や自分自身に向き合いながら乗り越えていってください。コロナ禍も乗り越えてきた皆さんならきっとできるはずです。急がなくてもいいですよ。じっくりゆっくりと『向き合い』ながら自己を表現していきましょう。

大丈夫ですよ。

小説家の下村湖人は、その著書『青年の思索のために』の中で、ある飛行家が長距離飛行の秘訣として常に守っていたといわれる言葉を紹介しています。

今、人生の大飛行となる未来の社会へ羽ばたいていく皆さんに、その言葉を贈ります。

「高く飛べ。まっすぐに飛べ。ゆっくり飛べ。」

以上、式辞とします。

令和7年3月1日

島根県立三刀屋高等学校

掛 合 分 校

校 長 本 間 達 也



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【3月号②】令和7年3月21日



■“初めて”との出会い

※本稿は令和6年度「海外研修旅行記録集」(令和7年3月発行)に寄稿したものを一部改編したものです。

今年度、コロナ禍により延期となっていた2年生「台湾研修旅行」を10月24日(木)～26日(土)の日程で無事実施することができました。研修旅行実施にあたっては、雲南市役所の皆様、JAや宇山営農組合ほか関係各機関・団体の皆様、地域の皆様、保護者の皆様に多大なご理解とご支援をいただきましたこと、まずもって御礼申し上げます。ありがとうございました。

掛高では、1998(平成10)年に海外研修旅行を開始し、訪問先をシンガポールとして4泊5日の研修旅行を実施してきました。その後20年が経過し研修内容等を検証するなかで、掛高が取り組んでいる「雲南のお米を応援するプロジェクト」といった地域をフィールドとした探究活動との関連も期待できる台湾に訪問先を変更し、2020(令和2)年からの実施を予定していました。しかし、コロナ禍による海外渡航自粛期間もあり実施を延期せざるを得ない状況となっていました。台湾に訪問先を変更して初めてとなる海外研修旅行、また数年間のブランクもあいまって、生徒の皆さんはもとより我々教職員にとっても一からのスタートとなり準備段階において戸惑う点も多くありましたが、雲南市役所、また雲南市PR大使も務めていらっしゃる林 定三様(鼎三国際企業有限公司会長)からの力強いバックアップをいただき、真理大学訪問や台北101タワー横に位置するショッピングモール微風南山店でのお米販売、現地小・中・高校生との交流活動等充実した研修内容を順調にこなすことができました。改めて感謝申し上げます。

2泊3日という短い日程の中、また台風等の影響により雨に降られる場面が多くありましたが台湾の皆さんのエネルギーなおもてなしに引きずられるかのように、生徒の皆さんが日に日に成長していくようすを目の当たりにすることができました。初めての飛行機、初めての外国等“初めて”が多くあった生徒の皆さんもいたのではないのでしょうか。これまで写真や映像等でのバーチャルな体験はあっても、その地をリアルに訪問することによって初めてわかることもあります。その地で感じる空気感や人々の生活感、食べ物の味やにおい、あるいは会話の間合いといったものは、バーチャルでは味わいにくいものです。また、海外研修旅行というリアルな体験は、日本にいと実感しにくい日本文化やコンテンツの魅力を再発見できる機会でもあります。例えば日本のアニメは、海外で高い人気を誇り今や立派な日本文化となっています。もちろん台湾でも日本のアニメは大人気なので、アニメの好きな人は、共通の話題によりあっという間に初めて接する人との距離感も縮まったのではないのでしょうか。

今回の台湾研修旅行における多くの“初めて”との出会いは、皆さん一人一人の持っている可能性を広げる契機になると思います。様々な“未知との遭遇”は、他人やモノに対してだけではなく、自分も知らなかった自分のポテンシャルとの“初めて”の出会いになるはずです。台湾研修旅行でのリアルな体験が、今後の人生の糧となることを期待しています。



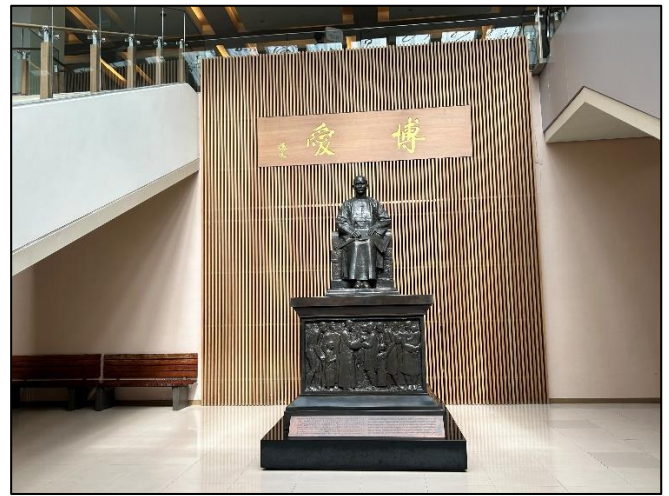
「微風南山 (Breeze NAN SHAN)」でのお米販売



華西街観光夜市



忠烈祠



故宮博物院



台北 101 タワー



九份



十分



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【3月号③】令和6年3月11日



■あの日あの時—忘れてはいけないこと—

2011（平成23）年3月11日14時46分、三陸沖を震源とする最大震度7（M9.0）の東北地方太平洋沖地震が発生し、その後に発生した大津波により太平洋沿岸は壊滅的な被害を受けました。あの日あの時から13年が経ちました。

昨年8月、その地にある旧石巻市立大川小学校（宮城県）を訪れました。石巻市でも、多くの地域で震度6（弱～強）の激しい揺れが約3分間続き、その後に大津波が襲いました。大川小学校は、高さ約10メートルの大津波により全校児童108名の7割にあたる74名と教職員10名の84名が死亡、行方不明となりました。私が訪れた日は、その日のことが想像できないほど晴れ渡った空のもと自然豊かな景色が広がっていました。震災遺構として、現在もあの時のまま保存されている校舎等を目の当たりにし、多くの尊い命が失われたことに対して心が痛むとともに、改めて津波の恐ろしさを痛感しました。子どもたちが毎日元気に過ごしていたはずの教室棟の前には次のような碑が建立されていました。

2011年3月11日

いつもと同じ朝でした

「行ってきます」の後ろ姿を見送ったあの日

「寒かったでしょう」とあたたかい手で抱きしめてあげたい

March 11, 2011-

It was a morning like any other.

On that day, we saw them off after telling each other "Have a nice day."

How we wish we could hold them in warm arms and say "It was cold, wasn't it?"

涙が止まりませんでした。保護者の皆様のお気持ちを思うと、いたたまれなくなりました。学校管理者として、自然災害に対する日頃の備えと危機管理意識を高めておく必要性を強く心に刻みました。

震災から13年を前に、被災者の関係者の方がメディアのインタビューに対し「月日が経つとともに後悔ばかりが募ってくる」と答えていらっしゃいました。ご遺族の方々にお気持ちを思うと軽々に言葉を発することはできません。13年前のあの日あの時を前に、お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、今を生きる私たちにできることは何かを今一度考えています。

【大川小学校沿革】

1873（明治6）年	桃生郡釜谷小学校として開校
1985（昭和60）年	大川第一小学校と大川第二小学校が統合 大川小学校として現在の校舎が完成
2011（平成23）年3月11日	東日本大震災の津波で被災
2018（平成30）年3月31日	閉校

■旧大川小学校に設置されている碑

学校が残りました

思い出が残りました

そして これからも

われらいま きょうの日の 歴史を刻む

われらこそ あたらしい 未来をひらく

The school remained here.

Memories remained, too.

And more to come……

We will now carve the day called today in history.

We are the who will open up a new future.





■親になるということー子育ては“自分育て”ー

こども家庭庁が「親子のための相談 LINE」を開設しています。これは、子育てや親子関係について悩んだときに、こども（18歳未満）とその保護者の方などが相談できる窓口です。

自分が子どもの時には、親は「何でも知っている」「全て正しい」という感じでした。子どもにとって親は絶対的な存在であったように思います。当たり前のことですが、誰しも最初から親なわけではありません。子どもを授かって初めて“親”となるのです。親は親なりに、初めての子育てにとまどいながらも、子どもを正しい方向に導こうとして試行錯誤を繰り返しながら奮闘しているのだと思います。子どもの前では、ある種親としての威厳を保ちながらも内面では悩み、迷うこともあったでしょう。親となった

時、初めてその苦悩が実感できました。私自身、子育てがほぼ終わった歳になり、当時を振り返ってみると「あの時こうしてあげればよかった」「かわいそうなことをしたなあ」「こうしていたら違う結果になったかも？」など後悔の念に似た感情が湧いてきます。祖父母が孫をかわいがる傾向にあるのは、これまでの経験値に加え、子育て当時の後悔や反省の念を交えながら「今ならこんな風に接することができるのに」という思いに駆られるのだとも思います。ただ多くの親は、親になって間もない頃の慣れない子育てに対して、わからないことが多くありながらも懸命に向き合う努力をしてきたと思います。幾多の反省はしながらも、その事実については肯定的に受け止めてよいのではないのでしょうか。

子どもは一人一人異なった性格をもっています。兄弟姉妹であっても、まったく同じ性格というわけではありません。ただ、子どもは親の遺伝子を受け継いでいますから、自分の子ども一人一人が見せる性格や行動は、親自身がその要素を内包しているといえます。子育てを通して子どもの言動に接することで「親である自分にはこんな一面もあるんだ」と、これまで自分では意識していなかった部分を顕在化させてくれることもあります。子育ては、親である自分自身がもっている様々な可能性を確認しながら、より高みを目指していく“自分育て”でもあると思います。

子どもは、家族にとって、学校にとって、地域にとって宝物であるはずです。迷いながら、



悩みながらも互いに協働・連携しながら子育てに向き合っていければいいと思っています。

そして、子育てを“自分育て”にとらえるならば、子どもであっても大人であっても、互いに一人一人の前向きな姿勢をリスペクトする気持ちを持ち続けていきたいと思っています。

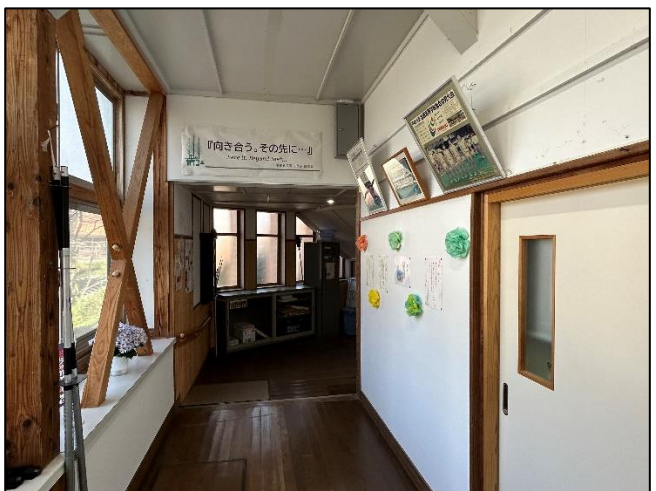
追伸

私事ですが、3月末をもって役職定年となり掛高を去ることとなりました。校長発『ほんりゅう』もこれが最終号となります。令和5年4月4日に発刊（校長発『ほんりゅう』4月号）して以来2年間で通算37号発刊することができました。『ほんりゅう』という名称には「掛高のキャッチコピーである『本物のあり方』とともに、枝葉末節にとらわれず物事の大局をとらえ正々堂々と意見の言える、また流量豊富な大河のように、器の大きさ・懐の大きさをあわせ持つ人であってほしい」という願いを含めています（「ほんまりゅう（本間流）」というニュアンスも加味しています）。毎号、皆さんにお伝えしたいことをテーマにして発刊してきました。ご高覧いただけたならば幸甚です。

「理想のつばさ高くはばたく 若きわれらは世紀を担う」

今後の掛高の益々の発展を祈念しています。

これまでありがとうございました。





島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【3月号③】令和7年3月24日



■思考のストロー現象—3 学期終業式にて—

今日で3学期、令和6年度が終わります。2年生の皆さんは高校生活の3分の2が、1年生の皆さんは3分の1が終わろうとしています。入学式から早いもので2年、1年が経ちました。皆さんが入学時に抱いていた高校生活への思いや期待は、実感できるものになっているでしょうか？昨年度の3学期終業式で、私は「この春休みを“階段の踊り場”にとらえ、あの時のこと、その時のことを自分なりに振り返り、一つ上のステージを目指すための修正期間と考えてください。」と言いました。春休みは4月からの1年間を振り返り、次のステージに向かうための力を蓄える重要な期間です。

東京・品川駅前の交差点に立つと「世界初、品川発。名古屋まで最速40分 大阪まで最速67分 リニア中央新幹線、開業に向けて進行中！」※という大きな看板が目飛び込んできます。新幹線は昨年開通60周年を迎えました。私と同年です。2025年現在新幹線が通っていない都道府県は、千葉・山梨・三重・奈良・和歌山・鳥取・香川・徳島・愛媛・高知・大分・宮崎・沖縄、そして島根県です。松江駅前には「中海・宍道湖・大山圏域への新幹線整備の実現を目指して」というフレーズとともに山陰新幹線、伯備新幹線のルートも示されています。山陰新幹線は「全国新幹線整備法」に基づき、建設を開始すべき新幹線鉄道の路線（大阪市・下関市間）として1983（昭和48）年に基本計画が決定されました。しかし、現在に至っても計画は進展していません。都市部ばかり交通網が整備されていく感じで、地方としては何か取り残されている感じもします。しかし、新幹線が開通したら本当に便利になるのでしょうか？雲南市も経由する高速道路「松江・尾道線」を例にとり考えてみるとどうでしょう。確かに松江市から尾道市に行くには、早くて便利です。雲南市から松江・広島方面に行くにも同様です。では、沿線の市町には高速道路開通の恩恵があるのでしょうか？高速道路も新幹線も恩恵を受けるのは、始発地点と終点地点であり必ずしも沿線地域に恩恵をもたらすとは限りません。むしろ人口流出等により衰退の危機を招くことすらあります。これを、コップに入った飲み物をストローで飲む様子に例えて「ストロー現象」とか「ストロー効果」と呼びます。

最近では、いかに効率よく時間を使いながら成果を上げていけるかが重要視される傾向にあります。いわゆるタイパとかタムパ（タイムパフォーマンス・時間対効果）とか呼ばれる考え方です。もちろん、それは仕事をこなす上では重要なものです。ただ、効率を重視するあまりクオリティの低下につながる場合もあります。皆さんが今年度取り組んできた探究活動などにおいては、少々時間がかかっても、問いを立て結論を導き出すまでのプロセスこそを大切にする姿勢が必要です。この姿勢は、日々の生活における出来事に対しても言えることではないでしょうか。すぐに答えにたどり着こうとする“思考のストロー現象”に陥るのではなく、時に立ち止まって丁寧に向き合う時間をつくってみる。案外その方が、早く目的地にたどり着けるかもしれません。

最後に、今年度1学期の始業式、入学式で話した言葉をもう一度皆さんに贈ります。「自分の中に可能性の芽を見つけたら、自分なりの方法で少しずつ大きく育てていきましょう。その先に、あなた自身のパーソナリティが形づくられていくはずです。そして、自分なりの方法で、自分を表現していきましょう。急がなくてもいいですよ。じっくりゆっくりと向き合ってください。今の自分を少し超えて、今以上の自分をめざして、今一度自分自身に向き合ってみませんか？」

どうか充実した春休みを、そしてイチニチイチニチというプロセスを大切にして高校生活を過ごしてください。三高生徒の皆さんをいつまでも応援しています。

※2024年8月現在。2025年には「DRAMATIC FUTURE EXPRESS 走り出した未来 リニアと新しい物語を描こう」となっています。

東京品川駅前



松江駅前



2024年8月現在



2025年3月現在